

※答は、すべて解答用紙のワクの中におさまるように書きなさい。

一 小学五年生の宇佐子は同じクラスのミキちゃんと仲良くしていますが、ミキちゃんがクラスで孤立していることを担任の先生から聞いた宇佐子のお母さんは、宇佐子のことを心配しています。そして、吹奏楽コンクールを見るためにミキちゃんと二人だけで県民ホールへ行くという宇佐子の申し出を、翌日ミキちゃんを家に連れてくるという条件つきで許可したお母さんでしたが、結局宇佐子には内緒で県民ホールまで付いて行きました。このことをふまえて次の文章を読み、後の問に答えなさい。

「わお」

自分の部屋の窓を開けた宇佐子は、思わず声を上げて後退りした。

二階の窓の手すりに止まろうとしていた鳥もよほど驚いたのだろう。止まろうとしたその瞬間に、ちょうど宇佐子が窓を開けたのだ。宇佐子の声に驚いた鳥は、黒光りする羽根を飛ばたかせながら、手すりをつかみ損ねて、足を滑らせた。宇佐子と出つくわしてしまった鳥も、大空に飛び上がりたのか、手すりに止まりたいのか、自分で自分の動きが解らなくなったようだ。鳥は傾いた姿勢のまま、手すりからずると滑り、傾きながら下に落ちかけた。あわてた様子で、足の爪を立てたまま滑り落ちる。

身体が傾いた鳥は姿勢を立て直すように、大急ぎで二度、三度と羽ばたいた。ようやく重い身体を空中に押し上げることに成功した。しばらくあわてて羽根を忙しく動かしていた。それから、一旦、手すりを黒い足でがっちりと握えた。そのまま、羽根をたたむこともなく、ばさつばさと大きな黒い翼を広げて飛び上がった。空の上に舞い上がると、クワツと一声鳴いた。

宇佐子はしばらく鳥の行方を大空の彼方に追った。鳥はばさばさと羽ばたきながら、家々の屋根が重なる街の方向に消えた。鳥は間近で見ると恐ろしく大きい。鋭い嘴の威力はそうとうにありそうで、鳥の姿が消えてしまつてからも、宇佐子の心臓はどきどきしていた。きっと鳥もどこかの家の軒先で胸をなで下ろしているに違いなかった。

「ほっ」

宇佐子は大きく息をついた。それから、冷蔵庫から持ってきた冷たいコーラを一口ぐりと飲んだ。お父さんがお酒を飲んだ時みたいに、

「カンロ、カンロ」

と言ってみた。言つてはみたものの、冷たいコーラはあまり甘露ではなかった。お母さんと口を利いていないから、冷たいコーラさえなんとなく苦かった。始まりは朝ご飯の時だ。「なんでミキちゃんをうちに呼ばなかったの」と聞かれたから、宇佐子は黙ってしまった。「なんで県民ホールに付いて来たの」と言い返すこともしなかった。

お母さんはただ、なぜミキちゃんを家に呼ばないのかと宇佐子に言っただけだが、宇佐子はお母さんに「約束を破つたのはそちのほうじゃない」と言いたいような気がしていた。お母さんの顔がそういうことを言っているように見えた。お母さんの声が、宇佐子に迫って来た。よく考えてみると、県民ホールに付いて来てはいけないというような約束は、お母さんとはしていない。だから、お母さんが宇佐子とミキちゃんのあとをそつと付いて来たからと言って、ちつとも約束を破つたことにはならない。でも、宇佐子是不機嫌だった。

宇佐子はお母さんの顔を見るだけで黙っていた。

お母さん不機嫌に黙った。

朝御飯の食卓には不機嫌という霧が降った。外は明るい夏だ。

宇佐子は目玉焼きの黄身を潰した。黄色い黄身が白いお皿の上に流れ出す。黄身の流れを見ながら宇佐子は、そ

の粘^{ねば}ついたものが自分の不満の形を自然に描^{えが}き出しているような気がした。お母さんの心配が解^わらないわけではない。宇佐子自身もミキちゃんと二人だけで電車に乗って、二度も乗り換えをするのはできるかどうか不安だった。それに、小学生だけで電車に乗るのは、とても悪いことなのではないか？ という気もしなくはなかった。夏休み前に、学校で配られたプリントにも「子どもだけで遠出はさせないでください」とあるくらいだ。そういう後ろめたさがあるから、①余計にお母さんが内緒^{ないしょ}で吹奏楽コンクールが行われている県民ホールまで付いて来たのは、なんだかインチキだという腹立ちを呼ぶ。宇佐子是不機嫌^{ふきげん}そうに黙^{だま}ったお母さんの顔を見ると、「いけないんだ、子どもだけで電車に乗っちゃいけないんだ」という声が聞こえてくるような気がした。きっとクラスの誰^{だれ}かに、ミキちゃんと県民ホールに出かけたことが伝わったら、そう言われるだろう。「いけないんだ、いけないんだ」と言うのは銀河君かもしれない。エリカちゃんも同じように節をつけて、そう言うかもしれない。矛盾^{むじゅん}しているかもしれないが、だから、一度は二人だけで県民ホールまで出かけてもいいと許可したのに、内緒で付いて来るお母さんは、宇佐子を裏切っているような感じがしてならなかった。「いけないんだ、いけないんだ」と節を付けて囁^{ささ}された時に「だってお母さんがいいって言ったもの」と思い切って言えなくなってしまう。

お母さんの手がすつと宇佐子のお皿に伸びた。白いお皿の上に広がった黄身をお母さんはパンで拭^ふいて口の中に放^{ほう}り込んだ。宇佐子の不満が溶^とけ出したように見えた黄身の真ん中に、お母さんがパンで拭^{ぬぐ}った白い筋が出来た。それまで、ただ押し黙^{もく}っていた宇佐子がプツと頬^ほをふくらました。いつもなら、宇佐子は頬をふくらますと、怒^{おど}っているお母さんも怒った顔の下に、そつと微笑^{びしょう}が浮かぶところだ。でも、今日のお母さんは黙^{もく}っている顔の下に微笑を忍^{しの}ばせたりしなかった。

②お母さんはちよつと目を伏^ふせたのだ。宇佐子はそういうお母さんの顔を見て、「あれれ」と意外だった。お母さんが怒っている時とは違う様子を見せたのだ。「あれれれ？ 怒っているんじゃないのかな」と宇佐子はふくらませた頬を引っ込めた。

なんだか怒られているのと微妙^{びみょう}に違う。

お母さんは「どうしてミキちゃんをうちに連れて来ないの」と言っただけだ。約束を破^{やぶ}ったとも言っていないし、どうしても連れて来なさいとも言っていない。宇佐子はそう言われたような気がしているだけだった。気がしているだけで、お母さんも何も言わないから、宇佐子は、ますますお母さんがミキちゃんのことを悪く思っているように思えて仕方がない。

不機嫌な霧^{きり}は朝食のテーブルの上に漂^たったまま消えなかった。お母さんが下を向くから宇佐子も下を向いて、ご飯を食べた。宇佐子はお母さんの手元に、手を伸ばしてパンを一枚とると、お母さんがしたのと同じように、お皿についた目玉焼きの黄身をきれいに拭き取って口に運んだ。宇佐子の不満を描き出したような粘ついた黄身の中に、お母さんが一筋描いた白い線は、宇佐子の手で丹念^{たんねん}に消されてしまった。

息の詰^{つま}まるような朝御飯^{あそひめ}だった。それから宇佐子はお母さんと口を利^きいていない。冷蔵庫の中から缶^{かん}コーラを出した時も、流^{なが}して洗^{せん}い物をしていたお母さんは振り向かなかった。「ご飯のあとにすぐコーラなんか飲んじゃダメよ」と言うかと思っただのに何も言わなかった。宇佐子は「コーラ飲んでいい？」と喉^{のど}まで出^でかかった言葉を飲み込んだ。根競^{こんく}べが始^{はじ}まっていた。いったい何を巡^{めぐ}った根競べをしているのか、お母さんにも宇佐子にも解^はらない根競べだけれども、口を先に利^きいたほうが負けというのだけは、お互^{たが}いに解^とけている。どうもそういうことになっているらしい。宇佐子は冷たいコーラを持つと二階の自分の部屋に上がった。

「カンロ、カンロ」

宇佐子はまだ一度、お酒を飲んだ時のお父さんのまねをしてみた。コーラはやっぱ苦いままだった。そのうえ、③先刻^{さつき}の鳥^{からす}はお母さんが宇佐子の様子を見に来させたのじゃないかという気さえしてきた。鳥はどうに街の中に消えて、出会った時の胸のどきどきも納^なまっていた。そうしてみると、先刻の黒い鳥と一緒に県民ホールの自動販売機の前でコーラを飲んでいたお母さんの白い喉が、まるでオセロゲームの駒^{こま}の裏表のように思えてきた。

(中沢けい『うさぎとトランペット』より)

問一——①「余計にお母さんが内緒で吹奏楽コンクールが行われている県民ホールまで付いて来たのは、なんだかインチキだという腹立ちを呼ぶ」とありますが、宇佐子が「腹立ち」を感じているのはなぜですか。説明しなさい。

問二——②「お母さんはちよつと目を伏せたのだ」とありますが、その様子を見る前と後では、お母さんの心情についての宇佐子のとらえ方は、どのように変化しましたか。説明しなさい。

問三 本文において、「鳥」は何かを暗に示していると考えられます。——③「先刻の鳥はお母さんが宇佐子の様子を見に来させたのじやないかという気さえしてきた」とありますが、ここで宇佐子は「鳥」をどのようなものとしてとらえ直しているのでしょうか。本文の最初に描かれている「鳥」の様子をふまえて、わかりやすく説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

1キョウリの小学校が建て替えられ、その記念の写真が届いた。鉄筋コンクリート三階建てのこじんまりとした学校だが、図面を見て「おやつ」と思った。教室が各学年に一つしかないのである。私の時代には一学年二学級であつたが、今は全児童数が百名。一学年は二十名にもみたないらしい。この新しい学校はまさに過疎の時代の小学校なのだ。もともと各階に二教室分より少し狭いワークスペースという空間がとってあり、また多目的ホールなどもついている。もし児童数がふえたら、こういうスペースが教室に転用されるのだろうか。

過疎の時代という言葉をつかったが、実は最近、この過疎ということに疑問を持っている。過疎とは、過疎ではなかった時代を基準にした物言いだが、人口の多かった時代はせいぜいこの百年あまり。殖産興業、富国強兵を合言葉にして、日本が近代国家の建設を目指した近代百年の間は、生めよ増やせよという調子で人口が増えた。ちなみに明治の半ば頃までの日本の人口は三千万から四千万くらいだったと言われている。飢饉、流行病、天災などがいわば周期的に襲つて来て、だいたいこのくらいの人口で一定していた。ところが、近代に入ると、科学技術や医学などの発展で食糧事情や病気対策などが2コウテンし、天災もある程度までは防げるようになった。しかも国は人口増加対策をとったから爆発的に人口が増えたのである。その結果が一億二千万の現在の人口。百年前の三倍か四倍になった。

過疎とはそんな特殊な近代を基準にした物言いではないだろうか。しかも百年という時代は、人類や宇宙の気が遠くなるような長い歴史のほんの一瞬にすぎない。基準にするにはあまりにも短すぎる時間だ。むしろ、過疎でなかったこの百年をきわめて特殊な時代ととらえ、過疎こそが常態であると考えるべきではないだろうか。

過疎が常態だと見なすと、たとえば変化や進歩をあまり求めないことになるだろう。近代においては変化や進歩が価値であり、人口の増加もそんな価値の一つであつた。だが、そんな価値観とは別に、①変化しないものの中の価値を求めてもよい。つまり、過疎になったとしたら、その少ない人口で生きる知恵を発揮すればよいということ。

過疎現象を克服しようとして、今は各地で村おこし、町おこしがさかんであり、私などにもそのための会議や行事に参加してほしいという依頼が時々ある。そういう過疎対策が人口の増加などを目指して、すなわち従来の価値観で行われているかぎり、私にはあまり興味がなない。百人の村が十人の村になったとしたら、その十人による村を新しく作ればよい。変化や進歩は乏しいだろうが、変化しないこと、進歩しないことの価値が見えてくるかもしれない。

ない。たとえば退屈たいくつきわまる時間の中にある充足感じゅうぞくかんや悦楽えつらく。

現実の過疎化現象かそには、老人ばかりが多くなって若者が定着しないなどという現象がともなっている。それはそれで深刻な事態なのだが、老人ばかりになったら老人だけの村を作るという方法もある。実際にはそんな村を作ることは不可能だろうが、そんな可能性があるとすることを思考の回路として持っておきたいのである。

話題が急に変わるが、ちよつとした用事があって②熊本、姫路、明石を訪れた。いずれも今に残る城跡じょうせきを中心に町が作られている都市だ。こないいわゆる城下町は、今日においても日本のもっとも優れた都市環境かんきやうを誇ほこっていると云ってよい。そしてその都市の原型は近代以前に作られた。近代の価値である変化も進歩も、町の姿を変えてしまうほどには力を発揮できなかったのである。いささか強引ごういんだが、近代百年にとらわれなくてもよい一つの例になるだろう。

がんばるわなんて言うなよ草の花

これは私の俳句。「がんばる」という言葉は今は一種の挨拶語あいさつになっており、だれもが気軽に「がんばります」とか「がんばれよ」と言う。私などもなにかの相談にきた学生について「がんばれよ」と言ってしまう。ある日、そのことにふと気づき、「がんばる」の氾濫はんらんにわれながら愕然がくぜんとした。まるで一億二千万人がいつせいに「がんばっている」ようではないか。そこでこの便利な言葉を3キंकにした。③「がんばる」という意味を表現しなければならぬときでも別の言葉を使うことにしたのである。ところがこれがなかなかむづかしい。「がんばる」を言わないためにひそかにがんばっているようなことになった。でも、こんな矛盾むじゅんがもたらす何かにひそかに期待している。すくなくともそれは、私の思考の回路を広げてくれる気がするからである。

さて、ここまで書いてから改めてわが母校の新校舎を眺めると、各階のワークスペースや多目的ホールが4イミシンチョウに見える。それらは教室の予備の空間ではなく、百人の子どもたちが自分を伸ばす空間なのだ。そうであってほしい。

*本文中の「近代」とは、明治時代から現在にいたる期間を指しています。

(坪内稔典『大事に小事』より)

問一——①「変化しないものの中の価値を求めてもよい」とありますが、「変化しないものの中の価値を求める」とは、どういうことだと思いますか。自分の言葉でわかりやすく説明しなさい。

問二——②「熊本、姫路、明石を訪れた」とありますが、筆者はこのような城下町のどういう点が良いと考えているのでしょうか。わかりやすく説明しなさい。

問三——③『『がんばる』』という意味を表現しなければならぬときでも別の言葉を使うことにした」とありますが、本文全体から読み取れる筆者の考え方にしたがって、次の会話文の波線部を「別の言葉」に言い換えなさい。

「今日のピアノの発表会、がんばってください。」

問四 本文に引用されている俳句「がんばるわなんて言うなよ草の花」の季語は「草の花」で、秋の野に咲く名もない草の花のことを指します。この句の中で、「がんばるわなんて言うなよ」という言葉に対して、「草の花」は、どのようなイメージを与える役割を果たしていますか。考えられることを、わかりやすく述べなさい。

問五 —— 1～4のカタカナの部分、漢字に改めなさい。一画ずついいねいに書くこと。

A
国
語

11

解答用紙

受験番号

氏 名

--

問

--

問二

--	--

問三

--	--

問

--	--

問

--	--

問三

問四

--	--	--	--

問五

1801

1000